

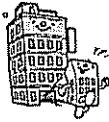
使用済トナーカートリッジの回収を通じて
カンボジアの学校建設を支援

CastaNet

カスタマー(お客様)とネットワークで事業を拡げ、
カスタネットのように打てば響く会社を目指す

CastaNet

- 大日本スクリーン製造株式会社の社内ベンチャー
支援制度(退職型)を利用して創業(2001年2月3日)
- 町の文房具屋さん、大手通販会社の良いところを
取り入れた新しいビジネスモデルを構築
- いつも社会と共鳴する企業をめざし、社会貢献と事業
がシンクロナイズする姿を追い求めています。



CastaNet

～創業時から実施～

- 福祉事業の支援を通じて社会に貢献
 - 授産施設などに軽作業を発注
 - 障害者スポーツ大会に協賛
 - カンボジアの教育環境支援活動を展開
中古文房具寄贈・学校建設



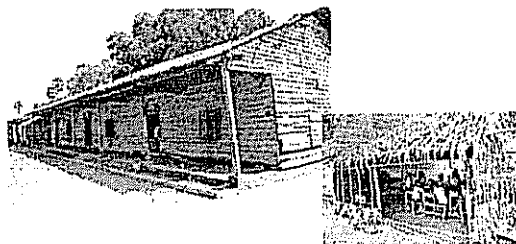
文具もカンボジアへ

子どもたちの手に届きました！！



文具もカンボジアへ

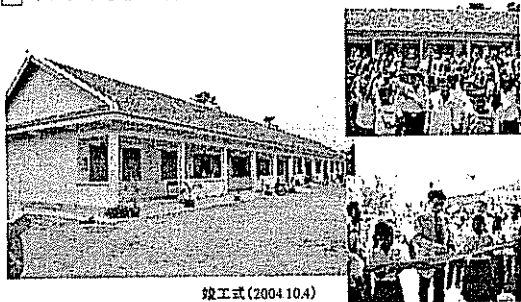
トレア村トレア小学校の新校舎建設活動を開始



1980年に住民によって建設された木造校舎と仮設教室

文具もカンボジアへ

トレア小学校の新校舎が完成しました。



竣工式(2004.10.4)

文具もカンボジアへ

社会貢献の継続活動には財源の確保が必要

使用済みトナーカートリッジが
カンボジアへの文具送付の財源となります。

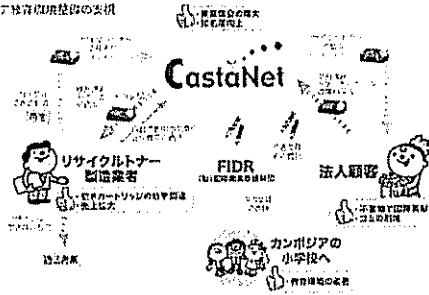
□ 1本あたり 50～250円



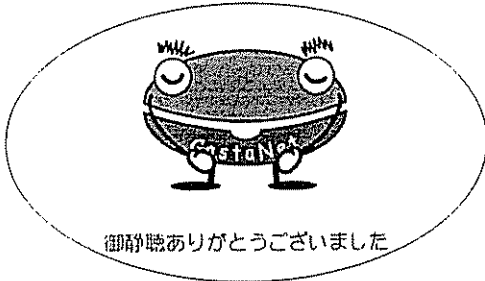
不要な物で社会貢献の財源、そして回収率のアップに。

それはボランティアから始まった
CastaNet 21世紀型ビジネスモデル
NPO活動と事業活動の融合

トナーカートリッジのリサイクルによる
カンボジア教育環境整備の支援



次の目標は、小児科病棟の建設活動



御静職ありがとうございました

<http://www.castanet.co.jp>

くらし

カンボジア・トレア村の子供たちに囲まれる植木カさん(中央)



内戦からの復興を目指すカンボジアの中部、トレア村にこのほど、小学校の新校舎が完成した。学校を建設したのは、文具、事務機器の通信販売や使用済みプリンターカートリッジの回収事業を手掛けているカスターネット(京都市南区)の植木カ社長。「トレア小学校で学んだ子供たちを、いつか留学生として日本に受け入れたい」と、同社長は夢を語った。

学ぶ喜び カンボジアの子に

京の社長が学校建設 中古文具寄贈も

カートリッジ回収事業の中で、中古の鉛筆やノート、ボールペンなども引き取っていた同社。中古文具の使い道に困っていたが、カンボジアで文具など教育資材が不足していることを知り、二年前に寄贈を始めた。さらに、財団法人国際開発救援財団(FIDR)と支援の相談をするうち、首都プノンペンの北に隣接するコンポンチュナン州トレア村の小



完成したトレア小学校の新校舎

地雷撤去 支援も 京の機構

カンボジアでは、京都市下京区の元会社経営者佐藤登久代さん(79)が代表を務める日本地雷処理機構(JDA、事務局・神奈川県鎌倉市)も支援活動を続けている。

現地で隊員を雇い、ブルドーザーなどを使って対人地雷の除去作業にあたってきたが、カンボジア政府の意向もあり、現在は地雷の回避教育に力を入れている。小学校などにポスターを張ったりノートを配り、地雷の避け方を伝えている。

一方、タイ国境に近い貧しい村に、マンゴーやパパイヤなど果樹の苗を贈っている。「栄養のある果樹を買わずに食べられるので、住民に好評」(事務局)という。

以前は国際ボランティア貯金や外務省の援助を受けていたが、現在は公的支援はなく、鎌倉市のコーラスグループのチャリティーコンサートなどから寄付を受け活動を続けている。

学校の新校舎を建設することになった。カートリッジ回収事業の収益か

は約半数だという。ボランティアとして日本から遠征式に参加した

女性(60)は、子供たちに折り紙を披露。一枚の色紙が「かぶと」に形を変えると、学校は子供たちの歓声や拍手で包まれた。ある男子児童は「きれいな校舎でうれしい。頑張って勉強して、いつか日本に行きたい」とほほ笑み、この「かぶと」をかぶって校庭を駆け回っていた。

トレア村に一つしかないこの小学校には、四百十四人が通学している。しかし、FIDRによると、カンボジアでは、一

家の働き手となって就学を断念することが少なくなく、義務教育の小学校に六年間通い続ける子供は約半数だという。

植木カ社長は、これを見た植木社長は、「学校建設だけに終わらせず、交流の中で日本の子供たちにも物の大切さや平和や命の尊さを伝えていきたい」と話していた。

「かぶと」をかぶって校庭を駆け回っていた。トレア村に一つしかないこの小学校には、四百十四人が通学している。しかし、FIDRによると、カンボジアでは、一家の働き手となって就学を断念することが少なくなく、義務教育の小学校に六年間通い続ける子供は約半数だという。